

## 「平成の政治改革」と公明党・創価学会(II)

平野 貞夫  
元参議院議員

### 参院協議会で感じた公明党の変質

3月26日、元参議院議員で構成する「参議院協議会」の第20回総会が開かれた。私は2004(平成16)年に引退して以来、一度も出席したことがなかった。例年、長寿会員への祝辞などのイベントをやっている。事務局から「米寿(88歳)になるので出席されたい」との案内があり、最近の政治状況に多少でも接することができるかと思ひ顔を出してみた。

白寿1名、米寿8名に尾辻秀久議長、長浜博行副議長、与野党の代表者がお祝いの挨拶をしてくれるとのこと。出席した長寿会員は米寿の5名で、まずその5名がお礼の挨拶をした。私が会員となって19年目に初めて出席したので注目された。私の挨拶の要旨は、

「この会に出席しなかった理由は、2007年に参院の問題議員と嫌われた村上正邦(自民)、筆坂秀世(共産)、平野貞夫(民主)の3人が、『参議院なんかいらぬ』という新書を出版して、皆さんから叱られていたからです。最近それがスッカリ変わり、国会での論戦でも衆院より立派で国民の評価も高くなりました。米寿のお祝いをしてやるということで、当時のお詫びを兼ねてまいりました……」と。

出席者はそれなりに喜んでくれたが、各党代表者の挨拶の中に、特別目立つものがあり驚いた。それは西田実仁公明党参議院会長の挨拶であった。埼玉県創価学会男子部の幹部だったというこの人の発言を聞いた私は20年近くの時間帯で、公明党・創価学会の信者の指導的立場の人間がこんな変わったのかという危

惧感だった。

挨拶の中で西田公明党参院会長は、いきなり参院憲法審査会の活動状況を説明しだした。長寿会員のお祝いの席では、まるで場違いの話だ。しかもその内容は衆院の憲法審査会のあり方を批判する始末である。その語り口はいかにも国会を公明党が中心になって運営しているという態度だった。

今年の安倍晋三元首相銃撃テロ事件で、統一教会の政治への関与が問題となり、類似のカルト性が問題となっている創価学会に、世論が注目している。こんな時期に、堂々と国会の中心になっている状況を見て、20年前とまったく変わったことに、しばし茫然とした。

### 『宗教問題』特集「公明党は生き残れるか」

参議院協議会の長寿祝いから帰宅すると、月刊誌『宗教問題』が届いていた。「これからの政界で公明党は生き残れるのか」の特集号であった。それぞれの専門家の話の中には、新しい情報もあり学ぶことが多かった。そして苦しい思い出があった。1993(平成5)年に細川護熙非自民連立政権が成立した時のことだった。公明党が政権づくりに協力し参加したこと

で、創価学会が政権に入ったと、国民の多くは感じるようになった時期だ。

その時、後藤田正晴先生(元官房長官)から叱られたというか、厳しく文句を言われたことが今でも頭から離れない。「小沢(一郎)も君も公明を政権に入れるという『禁じ手』を使った」という叱責だった。「禁じ手」とは、一般には「使ってはいけない手段」ということだが、勝負ごとなら反則の意味である。

後藤田さんの叱責に私は抵抗した。1967(昭和42)年に公明党が衆議院に進出して以来、当時、私は衆院事務局職員で園田直副議長時代から、公明党に政治的対主義の議会政治の理念と手続きを教えるのが内密の役割だった。これは当時の竹入義勝公明党委員長への要請でもあったし、事務局幹部も黙認してのことだった。細川非自民連立政権の成立は、その成果でもあった。

後藤田さんの政治改革論は、旧内務官僚の発想が残っていた。政治腐敗の取り締まりを中心に、日本の議会政治は発達途上で、官僚による「管理」が必要との方針だった。1988(昭和63)年のリクルート事件の後、自民党幹事長に就任した小沢一郎氏が「根本原因は衆院の選挙制度にある」と、後藤田さんを説得し

て始まったのが「平成の政治改革」だ。

その時期、私は衆院事務局委員長を辞め、政権交代政治の確立のため参院議員になっていた。事務局時代には後藤田自民党政治改革委員長の要請で、「政治改革大綱」の作成を手伝っていた。何時も後藤田さんの議会民主政治論の限界を指摘して議論をしていた。

後藤田さんの創価学会批判は、警察官僚のトップだけあって極めて厳しく、国民権論や平等論を主張しても、警察情報による過去・現在の問題を指摘して「創価学会を政権に関わらしてはならない」と、何度も言われていた。それに対し私は「問題はあるが、かなりの人が、政治と宗教や議会政治を理解してきた。政権交代政治への民主政治に協力してくれる」と、議論を続けていた。

細川非自民政権は、自社談合政治の継続派による妨害と、政権内の偽改革派の謀略に悩みながら国民の支援で、どうか政権交代を容易にする政治改革を実現させた。しかし自民党との妥協により不十分なものであった。反対派はこれ以上の改革を阻止するため、非自民政権を崩壊させるべく、細川首相を捏造スキャンダルで退陣させた。後継の羽田改政改革政権では、「新党さきがけ」も「社会党」も政権から離れ、自民守旧

派と一体であった。

かくして成立したのが、わが国議会史上最悪の反議会主義政権「村山富市自社と政権」である。これに對抗したのが、自民党内で海部俊樹元首相を擁立したグループ、新生党（羽田・小沢）、公明党、民社党、日本新党などが、「新進党」を結成し政権交代への具体的道筋を示すことになる。この新進党結成に至る経過に、公明党首脳陣と創価学会の池田大作名誉会長の決断があったことは、本誌319号で書いたとおりである。

1994（平成6）年12月に結成された新進党は、新生・日本新・民社・それに公明（解党手続きで参院一部党不参加）・自民党離脱組・無所属の衆院議員178人、参院議員36人の大政党が出現。党首に海部俊樹、幹事長に小沢一郎が選ばれた。自民党が新進党に本格的脅威を持ったのは、翌95（平成7）年の第17回参院院選挙であった。比例区で18名を当選させ15名の自民党を抜いたからだ。

この選挙結果を深刻に受け止めた自民党は、羽田非自民政権時代に設立した『四月会』を活用して反創価学会キャンペーンを本格化させる。池田名誉会長の証人喚問要求をはじめ、新興宗教にありがちなさまざま

な不祥事を取り上げて、創価学会潰しが行われた。極めつけは当時公明代表だった藤井富雄都議と山口組系後藤組の後藤忠政組長との「密会ビデオ」問題であった。

詳しくはノンフィクション作家の魚住昭氏の著書『野中広務 差別と権力』第14章「恐怖の絆」に記載されているが、要は藤井都議が後藤組長との密談で、創価学会にとって都合な国会議員やジャーナリストなどの始末を求め、その模様がビデオに隠し撮りされ、そのビデオが自民党に流れたという問題だった。このことは後藤組長自身も2010（平成22）年に刊行した著書『憚りながら』において、「第4章 創価学会との攻防」「元公明党都議との密会ビデオ」と題してその存在を認めている。

この問題は、96（平成8）年の第136回通常国会、俗に「住専国会」で噴出した。自民党は野中幹事長代理が、旧公明党の衆院議員で、新進党参加にもっとも熱心だった権藤恒夫議員に持ちかけたことよって始まった。

「総予算成立に協力しないと、ビデオを公開する」と脅かされたわけだ。私に解決の知恵を出せとのことと、小沢新進党党首に相談して総予算の修正で妥協す

ることになる。住専関係の6850億円を削除するとの要求を政府与党が了承せず、私が予算補則にその趣旨を入れる修正を考え、創価学会の危機を回避した。だがその後、「ビデオ問題」は事ある度に利用された。その結果、創価学会は新進党の小沢党首を攻撃するようになり自民党の配下へと立ち位置を変えていった。

そして池田名誉会長は、読売新聞社の渡辺恒雄主筆の指導で、経営不振にあえぐ新聞各社に対し聖教新聞の印刷業務を委託することで経営に協力。創価学会や公明党を自民党亜流派の下僕にしていた。その意味では、この「密会ビデオ」問題が、自公連立政権発端の大きなカギであることは間違いない。

安倍元首相の不幸な死は、統一教会と自民党の構造的癒着で国民的批判を受けている。この問題は創価学会と政治の問題に直結する。『宗教問題』の特集は、これからの展開も示唆したものだ。公明党・創価学会と45年間付き合ってきた私は、心友・故権藤恒夫氏の遺言が心に残っている。

「真の信仰心を持たなければ、国民を幸福にする政治はできない。偽の信仰心を政治に利用することは、国民を不幸にするだけでなく、国家社会を破壊させる」